



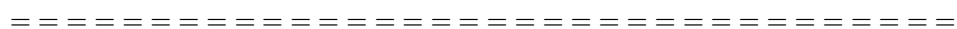
地域日本語支援ニュース こだま 第 272 号

2015.3.12



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

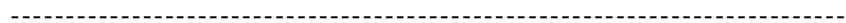
【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



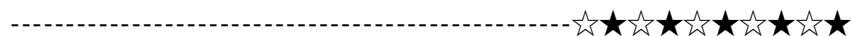
■ともに生きる■

ヴァッタ・ヴァバンさんに聞く ～その 1～

「古き良き日本を残しつつ、新たな画期的な風を」



ヴァッタ・ヴァバンさんは、1998 年 22 歳の時にネパールから来日され、現在は飲食店、旅行業、アパレル業、ホテル業を展開する株式会社 TBI の会長をされています。東京・新宿の TBI 本社に、以前からヴァッタさんと親交のある AJALT の関口が伺いました。



——来日のきっかけは。

私は、子供のころから膝をまげて座る習慣がありまして。

——（聞き手：以下略 ネパールにはそういう習慣があるんですか。）

いえ、私だけです。お祖母ちゃんが日本人扱いねって。それで、ストライク、日本、日本。大きくなって文化の攻撃を受けました。NHK の「おしん」というドラマが流れて、絶対日本だ、と。

——（でも、「おしん」は可哀想じゃないですか。）

それをどういう目線で見えるか。何回も失敗しても挑戦し続け最終的に成功する物語なんで、「こんな辛い時があった。でも諦めない」そういうところがストライクゾーンだったんじゃないですか。それがきっかけです。

——来日当時のご苦労は。

そこまで不自由しなかったんですが、来日してちょっと足りないところはア

アルバイトでやりくりしました。1週に（留学生の）時間の制限がありまして、時給が高いところを目指して。

1年半日本語学校、大学は向こうで卒業してたんで、東海大学で大学院の研究生として1年がんばりました。最初はマスコミ（志望）だったので、NHKでネパールのラジオ番組がなかったものですから、やらして頂けないでしょうか、と話に行ったんです。そしたら予算がないと言われたんで、働くところがないなあ、自分でやるしかない。それでアルバイトに精をだしました。これは一つの学校だ、お金を貰いながら言葉も学べると思い、いろいろ転々として、和洋中いろいろな所で研修した結果、ちょっと自信がついたんですよ。自分で経営できると。

衣食住の重要性はどんな世界でも変わらないでしょう。その中でも食が一番ですよ。それで食。当時日本の方々が海外に出られていて、海外のものが取り入れやすい環境になっていたんで、外食が一番じゃないかということで目をつけました。

——最初から起業を？

ええ、最初から起業しました。26歳で会社を作って。

——（日本社会で日本人だってなかなかできないのに、すごいですね。）

まあもしNHKにいたら今ビジネスマンじゃないかもしれないですね。でも何か会社をやりたいというのがずっとあったんで、たぶんNHKに入ったとしても、それで満足しなかったかもしれないですね。

——随分会社を大きくされましたね。

最初小さい1店舗、当時お世話になった方のフレンチレストランがありまして、あまり売り上げが良くなかったんですね、それで自分のアイデアを使ったら結構よくなりまして、自分は再生できるんだ、と自信がついたんですよ。それでもう1店舗、赤字続きの中華料理店を社長に経営させて頂けないですか、と申しあげました。ネパールレストランに変え、いかに有効活用するか、昼間は食べ放題、夜は飲み放題。昼間はエスニック料理が流行ったんですけど、夜は酒文化で仕事が終わって飲みに行きたいな、と言う人向けに。

——（じゃ、寝る暇なかったですね。）

ええ、朝も、昼も、夜も、夜はみんな帰して一人だけでまわしていました。

——（お体は壊さなかったですか。）

そうですね、健康的なんです。

——日本にいらして一番大変だったことは。

私は大変ではなく、いい経験だったと。大変とは思っていなかったんです。もちろん言葉が今ほどではないですから、経営になると外国人のハンディキャップは大きかったです。今ほど外国人にフレンドリーな世界ではなかったので、部屋を貸してくれなかったり、資金調達も大変でした。

——（慣れてなかったんですね日本人が。でもそれは大変とは思わない？）

いい経験。逆に誰が見ても信頼できる自分になっていこうと。まずは文化。そして実績を積んでいこう。きちんと税金を払って、従業員をいかに背負うことができるか。目標は次々作り、どんどん店舗展開しました。ついてきてくれた人たちは会社に入ったらみんな家族です。皆で達成しよう、家族は大切にしていこうと。

——お子さんの言葉や教育については。

子どもは、学校では英語、うちでは私も妻も日本語、たまに私の父や親戚が来た時にはネパール語で話します。私とはたまに、英語でも。その時の気分で。

——（吸収しても文字がないと忘れていきますから、環境があっても大人の努力が必要ですね。）

——言葉は文化ですね。

妻がそれを気にしています。日本人である限り、日本の学校を出た方がいいと。私たちは最後の最後まで自分たちの近くにいてほしいので、日本をベースに勉強してほしいと思っています。私は日本の文化にほれてるわけですから、日本で学ばせたいです。自分は日本の小学校や高校をでていないわけじゃないので、今からでも子どもの高校までの一連の流れと一緒に勉強し、わかっていけたらと思っています。そうすると自分も日本で育ったという感覚になるのかなあと。

——（素晴らしい発想ですね。）

（聞き手 公益社団法人国際日本語普及協会理事長 関口 明子）

★次号も引き続き「ヴァッタ・ヴァバンさんに聞く～その2～」を掲載します。

皆様からのご感想をお待ちしています。

---